茶道全書
仁
一之
炭寸法并風炉炭寸法
炉灰又漉乃事
風炉五徳伏様并土器
居紙寸法
炭組合様并白炭割
炭入組様乃事
461

# 古今茶道全書叙

今古嗜茶底避世之浮華貴
質之素朴是實風流一等授
俗之流也震旦扶桑其人其多
矣陸羽三篇盧仝茶歌是異
朝著者也如本朝建仁千光國師

入宋得茶飲朝明慧上人種茶實於栂尾其所種之深瀬寺園名至今存矣又宇治之茶者將軍義滿公所令大内某植也緇素貴賤雖嗜之多世亂相續多不究其蘊厥後聚樂法印紹鷗利休古田氏小堀氏細川氏片桐氏等其流多人也今集諸家秘奧鏤梓爲知斯樂者也醜拙亦多所謂憐兒者乎

旹

元禄六秊仲秋日

洛南紅染山鹿庵子漫叙

永昌坊書肆習成軒刊行

一此番者手始之茶の湯より参考諸事記し茶園中
院座敷釣釜之花生花勿論囲小花生の事後
之間書院二ノ間之花臺子の事不臺子同花り茶に
臺子先座風の仕立棚之式従手残結当と流書
出し自古茶入茶存宗匠名人之格式而之亦見
皆りあらき之取く盆點袋茶碗永続の習炉の灰
同炭風炉の灰同炭同点々事二ヶ点々大
同一点々事大同小及台天目板賞右出炉角炉台
勝手花勝手臺子の灰炭の習弘振宮振亭
主方の式法并路地入路地迎之作法路地庭山
水の當式禅掛一花り数寄屋書院當席路地べき

刀鍛冶茶碗石工等をはじめ蒔絵挽物石匠名不限蹤
釜師火炉紙宮撓子口式法一切の器ハ不及禮宗匠
茶会料理并菓子までも此外の細工物の品々までも式ある
故是仕立花挿一事一物に至まで上数寄屋大工と秘する
細工人の好事を論じ弁萬寸尺に傳へし子孫の数々と
數細古人の式法を吟味修練し茶鑑顕示するに於て
競く全書に述べ古の物にありて此を宗は之と常しで此骨に
記し年々に是を伝へ衛星述画録に写して之
伝りされ於数文肯不てはなはだひらく絵図に之を
世にむかひて數之泥なる不及小関録大阪は千蒔
條目とかく下二条知也




無始無終書院数寄屋并二之間不殘之ちる畳子不荘
之事附り書院四季之荘方より画るを花を生ル事之條目一流之
余昔日数寄道并出石宗二判に事人の家に流を受得しかと大
人の荘飾を見仕を伝はなり并に指挙用をすき家にて之を用ふに
てハ秘事を不語拳の妙を今しるして或ハ指数と文字に写し又ハ
家元に探り是を絵図にして文肯にて形をあらはし小も未熟を
茶道の全を傳ふるのみ

新春書院之荘り三幅對之式法

無始無終の書にあたる下に書院の床の一幅は茶を生る
不審庵の花を云此地之の一幅之　中ハ寿老人の花を生ずる
寿老人一入の会にあらし寿老人ハ鹿のあしらひ之草二瓶
松竹之志

大横物砂之抛花合

二幅對釣香炉之式法
四幅一對床荘式法

又書院荘り

一或説に三幅の荘りは神の軸の前に經冊紙なとをおきて又は数珠を
引て出る筆に茶に亦宗匠宗祇の傳ふる文台の世棚乃
硯合にはまはりて後に八景中方抔棚は地天の流荘りにはならぬ
定家卿の筆をも誌の事とも
遠くくの書説たるへ
しかりとあらすく
大事の荘りは其よ
いよなへくさにても
荘にあるへきなり

一此棚ハ向ひおもてに向
いよ板とつけて向板く
云板の前尻くみ合え先へ
は説有は荘りにおもよ
るへし
一荘つき地かるくあり板
おなし時は上客によりて
は入あるへし
一上の板の内荘りとつ
らへし加ふ香炉かさ
らぬ時ハ香盆に香炉香箱を合はせ小伽羅等香合
をへしなかに手棚にてなか地袋にも香炉もなき

一この茶湯成化時ハ雅作寳天目也数寄座圍ハいかゝ
不及手前に而て己ニをん埒もあるへし
一茶の上一盃とハ人よも此書に記をてくたる事なし
但今に至し言をよらぬく不く手方をゐし此年
比べ上宗匠名人のおく我ものくハ修学し集
く世の人のくあまね手舒べし
一茶碗子天目ともゆゑ其名なと之極まる同事て其天目三盃も大二
盃大一盃其天目又ハ台様其也但唐件台尖炉角炉風炉
ともの名其台或ハ備茶碗其茶杓にまで記
合其紙を不くよおもありといへとも此の事と能く
其ともしる人ハ何にあるもめやすし



重棚名物勝手間荘り

一此名物そろへの茶の湯ハ太閤之御代より
改所様聚楽にてある
ら其宗匠の名物様之れ
茶ら名て此中也へ
一釜ハあり座名ハ勝久
一香爐ハ珠光名ハ佑
一茶入ハ漢名ハ時め 昔堺に大霍小霍とて上二つの名物有小霍とて云ハ宗
入く中に牡丹花の蒔よりて 肩ハ此あつかふ云は中給ひあるとて名物也
け其家に伝手ハ肩衝と名残るく
名物の方茶入ともあくれてあるく 又房の会吾中納言殿にてあまて

一茶碗ハ高麗大徳寺没文器紅葉手にて掃如抛之名ハ
夕日山といふ名物也
一釜ハ尾張ぐり角釜茶碗釜と同前也
一香爐ハ陽成張成 堆朱にりにて布袋の香箱
一茶杓ハ宗易居士小月作他筒あり
右之道具勝手口の名物なれど名物とふ人勝手にて公儀
相手にて花入ハ所持勝手よき名物ありて数寄屋にてハうけ
の道具にて茶碗と心得べし
一右名物之内時分と云ハ茶入夕日山といふ茶碗ハ尤大切の名
物之制釜鑑の物ともれ花生の器ハ手出しハ数寄者名物
のかくら茶の文秘事なる器にて寄せらるべきもの

小堀遠州書院
床荘
違棚　遠州棚荘り

古田氏ノ書院床之飾り
同床
釣舟
刀掛

一たの板ハ上段ゆゑは　通棚　古田氏棚荘り
荘りハ一枚よ吊捻るゝ吊くたるとにより又ハ荘りやうほ多あり
一吹抽よハ袋のさゝれよ為しきハ仏入りしてゑもくぞう
一上板への内よ伽羅名料紙椒ハかゐすら沈の相ゑ鑑其ゐかんを射よかく宮の射りかつきとも又いろゐ香合するゝ行為なり

上段棚よ筆の荘

一要ゑ床まてハ尤一目桜床よハ志弔之筆の次我太へすゝと覚へ何方よても志心好ふて荘るへ仏へ入りてもに尤居

利休棚荘

千鳥棚

床棚口掩臺荘

一臺の京ゐよなし掩の総びあるゐへかゐよゐあり床ふうちゝ要の目廿一めへるゝ入の蒲閂参へ

網飾壺荘

一 網ハ紅の口緒よし
荘りハ茶壺と同し
ふかん茶す時に
同し網口結びよう
七文あり又結様
結様ハいろいろ上
結かこまる封付
茶捕の後ハ解き
ほまりて結と結
ぬかるなり

一 紗帛紙の上書きの
紙二枚ほとハ三枚摩折
りて書其上に硯箱
かく書なり

一 此の折方論会よろせ
て二枚折或ハ折かなり
一枚にても三枚にても
て書きとしにかゆゆきも

一 建続名代銘続窓の
中墨にて書掛の折方
紙其の寸法ハすへく法式のまゝり多く網結を

一 名代物茶事知識文字返の荘りハ先に後世の格式とかよう
也へ紙し書也

右書院床釣棚窓の
かざり床の荘り并板
飾り何れも式法之通ハ
床の唐物の書物ハ
珍物也又珍器を荘形
とて書ハ多く物数奇
に有物ゆゑの功ありとも
職所の式荘ハ書院
学問の所にあらざる
さりとも家内なれバ
あのつらなりよもとも
かり用所と承知して凡そ心安くて見るつもり気を付べし
茶人計りもあるすべくの個法なり

中棚 随菴板荘り

随庵 床之荘

枝珊瑚樹之荘
或達磨置合

佛棚

同荘
越前太守之荘
銅鑼
抱

具足棚
琅玕

一柳氏荘
唐物阿蘭陀物人形
御物棚

同書院床荘

一書院棚ともにかざり両々の飾具思入次第とはいふとも
茶知宗匠の至合を格式とすべし

北同氏棚荘

# 同書院床之荘

水精の荘

右之通荘ニ致る事なし乍去此棚の荘ハ夏格式あり利休宗匠の至合也

片桐石見守殿棚荘り

合木棚

仙盞瓶（センサンヒン）

塵壺

乃ぞ礼式正しき刻此芸者の盆は香盆く花盆合
とおのゝ同じく火入は香炉にたとへて入はかり和灰吹
は焼物を入させるは青磁のあり前に何も盆合て無礼
ありけるす後史を作の相すら盆合は古礼の法ぞん
宜しひと修道ありよしく稽の事一ありめく覆く秘密
は礼宜くと探知あるべし





茶は湯定の組並日案内卜定るを刻文度心得ある
事是先茶の湯あるく是第一也
一年始は初及を云たとへば十月口切又三月末炉の名残
次よ八月風炉の名残などして数寄を好む亀角又
六月土用の内ある茶肉の炭を云して定日朝茶会の事
財ことよく〳〵約束堅め数寄屋囲の内路次などある
無き客は日出入よあるべし当日より三日も出入よこ
とく掃除すべしさて炉中炭など世直し炉
中ならび灰近能く塩梅あるべし其上は又塩入念
を能こあらせひ母るけるじゆく仕掛安し
一二三も出入草履並べしたむ茶ようちつる出入する揃

座入の時も茶をたてうすの蓋してお
き茶巾一ツあをおき攪也茶入も拂拭してなくされいさき
ぬハ茶入の内ゆすて能く洗て水しかへして茶を入る也
茶巾釜帛紗に入ゆへつけ二三度ツヽもおくぬめ又ふひさ
しきよれバかりかけかいさすりてよしその外茶碗
外まし方て西香なき所に移しての置所の勝手へ
一当日のまへ日に炭組合て座入炭の所に置也水も添
置炭れに文字を書へし割炭輪炭胴炭点炭丸炭枝炭
不案内なる仕組也
一当日早天に路地掃除のさうちをそのもの等清め
させやとかく心へし扨座敷囲ハ常々より心いる

手紙よりあるべし座の茶の湯なくともその数寄
ならず花の入様さうぢあるべし
一座の茶の湯なくとも朝早くに炭丸へ炭入組火を移す
入置所のあがりにて羽箒香箱ハ囲の所に置く
一同勝手にて炉にさし入るも仕舞して水指に仕掛置
一勝手の方炭丸おけ置所に炭団入炭をと入れ火を移す
丸入置之炭団の炭とそれを入れて炭継ぎ炭をと入れる
ぬれ灰掃置べし尤これ灰ハ炭継ぎに入組
一帛紗茶巾紙勝手の羽箒灰汁置用炉口より六七分
め程入上に蓋置帛紗丸湯置
一客ある時一時まつ時に割炭輪炭よく火つけおく

右上段往古ハ三代将軍之時の往古の図

上段下炉脇ニ置候と云事上ニ而候
中通ハ羽箒ハ羽箒人ニ而も左羽の
様古風ニ而前置候ニ大ニなりて是ハ
時のなりゆき紹鴎之様に以下し

炭茶鐶羽箒香合也とある

羽箒ハ又ハ古さ茶入袋
入不申同く茶入ハ上ニ置候
為孫之角棚ニ炭斗茶入ニ置候
二重ハ大ニなりても候

小及台上棚 但角棚ニて置候香合ハ
新茶入ハ是ハ羽箒香合中ニ置小及台上
棚の様ハ是ハ茶入ハ加賀の肥州棚より新茶入
台通物数茶ニ而ハ大ニ置候茶入ハ
茶壺ニ而も使ふの時ニ茶入ハ使ふ
茶の湯の時ハ様ニ而も茶入も立置
之名物の内ニ而候て珍器也

定例何の台通もハ様あり
右棚角棚ニ鐶と香合する時ハ角のつまま
と加えまとなる置
又云左羽ハ香合と羽箒と角のつります

向ひ盃杓とめ候すらうるせて盃は略さるへく
して可見

定例

茶弥良鍔大さく器もる鍔乃茶入ま々人含人
指飲形見るまくさらなくもへあり鍔ハ指の柄
此上は此花ハ何も宗匠にこと也

扨て賞翫の書状鍔形茶入まて初め書印に盃也
二つあるる賞翫大切のもの者も八後蓋まても初まても
此記え

賞翫の羽何とう
於ても附及蓋そ
を初りても此
鍔ハ盃合とてよ
出ての鍔も合取
盃振早となる

角形三二ツ左に賞翫
の事あるいは此
盃

但香氣の内へと
莚りよハ伽羅文
盃し

右之盃合之儀は味皆炭茶の事は此方にもとより多く古代
宗匠より家の事もあり盃合あれとも其くの附ては無く気てん
佛抛散者多くなるを以て去る張盃合の法とある宗匠
其の気てんのてく多く其の工夫ありて盃合備わりて
りやくてあるは本を及焼して風をかつるハ一ツ角本と失
ひそう抛散者ハ用ひてくる可し茶事に付古人宗匠の

三畳大炭手前
カギ畳
炉

一壱畳半ニ而ハ釜を勝手の方へよする也又つくて
も茶を点ルニハ袋紙二折揚出て又一折を客口
角ノ方ニ茶分ル茶をあけたる茶わんを居へたり客へと出
なり一畳半ハ切ものゝ茶わんにて不自由成ものゝ心
持あるべし此の作法にかならず常に皆勤とかく
おもしろき事也

## 風炉の炭手前

付り風炉の灰ならびに灰を押て細かに仕る
かくす事ある仕方の一所に似る

一風炉の炭ハ座入に炭する事もあり又ハ客座出て
酒の中ほどにする事もあり

容方

大形ハ酒の前にすべし炭の仕様ハ先炉の炭入よ羽
箒火箸香合釜敷揚出風炉の左中に置
居へたり先羽箒にて右手にて釜の蓋をふき拭て
蓋を揚りに置ちんけ袋紙にて釜を勝手の方
の膝とを客と向ふ方の方へ向ひ引出し左手に
釜を文居へたり羽箒にて風炉を掃ひかくて又風

炉の中へ手を入五徳の中への灰をとり後(うしろ)の方
をなをし桐灰とハかきつけの灰をよせまする也
を仕廻ふときに火箸を入火箸をとりて
炭をとる也扨風炉の炭ハ丸く入ても一つ二つを
入置炭仕廻ふく釜をかけ大概(ろくろく)を置く
事也香合ハ炉より出る時出して羽箒(はばうき)ハ炉の前へ

置し又釜へ向ハ蓋をとりて鐶へ手をかけ引よせ
とき火箸にて一度に寄のけて釜ハ掃除して火を入
取蓋置をも出し手前の所にて仕廻ふ釜と風
炉のまハりへ寄て又鐶の方膝(ひざ)を立かゝるやうにして
釜の縁(ろ)を直し鐶(かん)をはづし鐶をかけて大概(ろくろく)丸風炉の中
へ入置し灰のうちに置ておくへ大概鐶をかけ置し釜
の蓋をかけて香合ハ料理(りやうり)ハ鐶より外の方より又酒
の肴なとはそのまゝに入也
一風炉の炭ハ胴炭小炭二ツと置炭をとるとさ
してもよし
一風炉の炭ハ釜の座(ざ)へつくて向をとほるとき柄杓をかるす

又炉之事の炭ハ釜の底へ近くつぐと嫌ふべし風炉
計ハ右此の實號也
大き無台子長板風炉共炭の格何れも台子まての
吟味ハ専とし可拵知也

炭寸法

一 基炭長さ七寸小口ハ二寸八分より二寸と胴炭とも云
一 おき炭長サ四寸小口ハ二寸二分或ハ二二分
一 割炭長一指四寸五分又ハ四寸三分五分或ハ二寸二寸五分二寸一寸五分之分も有
一 輪炭長サ一寸五分より八分迄もくさこ寸ゟ一寸五分
一 細炭ハ七寸八寸九寸と丸炭又割ても

一 中炭割五寸六分
一 割台の基太炭を二寸五分の切口にて丸付ハ輪炭とも云

風炉炭の寸法

一 長サ三寸五分二寸迄を台小口一寸一寸二分まて割
台の小口一寸八分九分迄
一 輪炭一寸五分廣さ縁く二寸迄

炉灰五徳の事

一 角を切り角より二寸六分ハ古法之一寸八分に切てよし
内ものを角をハまつく外ハ向ふの角へ丸くし
てもよしとも一但件の灰梅干色或ハ絹路

れ丸炉を利休角炉に改られし時紹鴎の乞とて一灰
の角を切丸炉の心に用られしより以後古法に丸
炉も角炉も是に倣ふ時代作法を見るべし
一五徳ハ灰より爪まで三寸五分内にほく紛とりまちの
てくとくの炉の内にて此内ハ二寸八分にする也自在
鎖の内ハ釜の底より二寸八分猶口釜ハ炉縁より八分上
て五徳入焼口炉縁より七分下て据打の据一寸四分え
めぐり据にて五徳と又刻生経ハ炉縁にいつまても不かゝる
据よとうなりまして炉中の据下より隠く据てよし

風炉五徳法据同古法寸法

一五徳の爪より風炉のふちまで一寸六分但釜によるべし



五徳より古釜うつけのふちまで二寸五分
一古釜の一灰より上出る所四分灰かけ据古釜のくいろ
ろ片ろ据にして内より灰ふて打付て置也
一古釜置付に五徳の角と古釜の内かどく灰のかくく
りんとなすべし○あい也
一灰の口傍一方に山三ツするの内ハ一方ハ四つ谷山二ある一
方ハ谷三つ此灰の事秘事小なる風炉ハ向をとる○ゟ
けふち菊の据にする大き成風炉ハうしろふちのき
を立て作る
一風炉の灰ハ焼の実ちるくらいに据えて据
灰をかけ左右にせく筆どもにして切るい置也

一ノ字ふくさ手拭ちやうにあたらず◯手掛け候

手前掃除ハ前夜に露地の掃除宜しく蜘の巣なとに

一床の間の掛物ハ花生置◯炉中毎日一気を付べし

茶の湯其外入用道具覚

懸物　絵筆　花籠　水次

花生　薄板　付り花切手巾　こさき打子

炭取　巻かね　釣炭　輪炭　香箸　羽箒　一灰去鐶　一灰拭　あく灰

竹口　蓋置　灰紙　火箸　鐶　永火箸

釜蓋　帛巾　古田　座丸　薫把　釜

風炉　水指　茶入袋　茶巾　茶杓　茶筅　筒共二　水

盆　蓋置　柄杓　帛巾　くり抜　湯こぼし　羽箒

家具膳　四鉢　食次　湯盆　ふた入　水こぼし　湯こぼし

一たばこ盆　たばこ入　火入　灰ふき　きせる　待合　腰掛道具に

一硯箱　紙　鏡台箱　糸針　右何も同

一草履　竹の皮草履　駒げたすげ蓋　紅葉蓋

ただし[illegible]の茶に代湯大人に露地人客の待合せ

かくし置くべし

一東山宗祇孫の路地の腰掛ハ水はしの前にあり
ちやせ板ニて井とこりぬき家鏡とへ家[illegible]
仕かく影と移し見る故よ見ら其ことに侍へ所の
むかしも鏡ら事にてこれハあるべし
一席庭ハ茶屋数多の都合にハ左鏡ら座敷の方にて孫大
人のちからにハ路地の家道ハ此茶会の上にて器
是茶人しるして猶ふ也別当宗匠の作と仰候を証之

茶道全書巻一終